



La Vida en Paraguay

～パラグアイでの暮らし～

青年海外協力隊
平成 25 年度 1 次隊
メルセデス・ミルトス
小学校配属
豊橋市立南部中学校
夏目千秋

オラ ケ タール
¡Hola! ¿Qué tal? (こんにちは。お元気ですか。) このパラグアイ通信も今回で最終回となります。これまでお付き合いいただきありがとうございました。

～活動紹介⑥ 算数練習問題集作りと講習会～

パラグアイ人の先生たちと協力して1～6年生用の算数問題集を「4D」作りました。そして、JICAの援助で、作成した先生たちの勤務先の学校の児童一人一人に配布することができました。もちろん私の配属先の子どもの手にも渡り、受け取った時の彼らの嬉しそうな笑顔がとても印象的でした。



3月5、6日に2日間にわたり、計6市の約160人の教員対象に算数の講習会を行いました。作成した問題集の紹介や教材を用いた教授法の講習会をしました。

板書中心の授業をすることが多いパラグアイの先生方にとって、教材を用いて説明をしたり、ゲームをしながら反復練習をしたりすることは目新しく、興味をもって講習会に参加する先生がたくさんいました。

パラグアイの先生たちと JICA ボランティアとが共同で行う講習会も今年で3回目となりました。1年目はパラグアイの先生とボランティアが半々で講師を務め、2年目はメインをパラグアイの先生が務めました。今年はさらに規模を拡大し、よりパラグアイの先生が活躍できる場が増えました。その分準備に苦戦した部分もありますが、練習を重ね自信をつけていく先生方はとても頼もしかったです。また、参加者からもすぐに授業に生かせる実践的な講義内容が好評で、配布された問題集にも強い関心を示してもらえました。今回の講習会で学んだことを実践してくれる先生達がいることを願うばかりです。



10までの数の合成分解を練習するハエたたきゲーム



分数カードを使ったゲーム



図を用いた異分母の足し算の説明

～パラグアイの文化・習慣～

15歳の誕生日（キンセ・アニョ）

パラグアイに限らず中南米の国々では、一般的に女の子が15歳の誕生日を迎えるときに盛大にお祝いをします。ドレスアップし、教会で祝福してもらい、夜は遅くまでパーティが開かれます。家族や友人とワルツを踊ったり、ミュージシャンの演奏があったり、その様子はまるで結婚式のようなのです。



アサード（ロースト肉）

パラグアイの食事で欠かせないのは、トウモロコシの粉で作った料理、マンディオカ芋、そして肉料理です。中でも牛肉や豚肉を網焼きしたアサードは、パラグアイ人の大好物です。誕生日や結婚式などお祝いごとの時には必ずアサード。私のステイ先では、毎週日曜日にもアサードの日です。普段日本で食べていたお肉よりも大きくて固いですが、おいしくいただくことができました。



パラグアイという国～1年9か月を振り返って～

パラグアイには周りの南米の国々のように迫力のある大自然や古代遺跡など、豊かな観光資源はありません。街には花と緑があふれ（首都アスンシオンも上空から見ると木々の多さに驚きます。）、街を離れると平坦な田園風景が続きます。田舎では、牛がのんびりと道路を歩いたり、草むらで音がしたと思ったら鶏が飛び出してきたり、犬が道端で日向ぼっこしていたり、とてもどこかで時間の流れがゆっくりとしていました。

出会った時の挨拶がどちらかが女性なら両頬にキスをすることに代表されるように、人と人の距離がとても近く、優しい人々が多い国です。見知らぬ人でも共通の知り合いや友達がいると、一気に距離が近くなります。愛情表現もはっきりしていて自分の子どもだけでなく、親戚の子や学校の児童に対しても“mi corazon, mi amor, mi querida”など「私の愛しい人」を意味する言葉を常にかけています。もちろん衝突して活動がうまくいかない時もありましたが、パラグアイ人の持ち前の明るくて前向きなところは何度も救われました。どこに行くにもマテやテレレ（お茶）を持ち歩き、ところ構わずみんなで回し飲み。初めは驚いたこの習慣も、気づけばマテやテレレなしでパラグアイでは暮らせないと感じるようになりました。

子ども達も人懐っこくて、^{アモル} amor（愛）や^{テ アモ} te amo（愛している）は日本語で何と言うのかを知りたがり、覚えると会う度に「愛している」と笑顔で言ってくれ、日本では考えられない状況にくすぐったさと温かさを感じました。学習環境が十分に整っているとは言い難い状況の中で授業が行われていますが、算数の勉強や折り紙が大好きで、いつも楽しみながら取り組んでいました。

パラグアイには約7000人の日系人が住んでいると言われています。来パする前は国内に日系移住地（9箇所）があることを全く知りませんでした。移住地を訪れ、移民の歴史を聞くことで、移民した日本人のとても苦勞と努力を知りました。彼らの動きが「日本人は勤勉で信頼できる」という良いイメージにつながっています。日本の真逆に位置し、言葉も気候も食べ物も習慣も何もかも違うはずなのに、暮らしやすいとどこか懐かしい感じがするのは、移民した方が多くいるからなのでしょう。

パラグアイは想像以上に素敵な国でした。いつか機会があればぜひ訪れて欲しいと思います。